

市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会

会長 池永薫爾

No.16

平成7年6月1日発行

編集：総務幹事 矢倉 睦

平成7年度山岳会総会開催

例年であれば2月に行われている山岳会総会ですが、本年は1月に起こった阪神大震災の影響で延期となり、4月8日（土）JR保養所にて開催されました。阪神大震災では、会員会友の中にも被災された方が数多くおられます。幸い会員会友の方ご本人は皆無事でいらっしゃいますが、ご親戚の方をなくされたり、ご自宅が全壊・半壊、またお勤め先が被災されたりと未だに不自由な生活を送っておられます。改めてお見舞い申し上げ、一日も早い復興をお祈りします。

総会では例年通り平成6年度の報告等が行われました。本総会より大橋会長が会長を退き名誉顧問となり、新会長には今まで副会長であった池永氏が就任されました。また、山岳部の部長を務めて下さっていた依田先生が市大を定年退職されたのに伴い、会員でもあり市大工学部助教授でもある小林先生が、新たに山岳部部長に就任されました。役員については本年は選任の年ではありませんので昨年度の総会報告（ニュースNo.13）の通りですが、今年大学を卒業したばかりの新OB高尾氏に山岳部指導幹事になっていただきました。

会 長	池 永 薫 爾
名誉顧問	大橋秀一郎
山岳部長	小 林 治 敏
山岳部指導幹事	高 尾 裕 （新規参加）

また、総務幹事より会則の一部変更の提案があり、総会にて承認されました。会員以外に新たに「賛助会員」が設けられます。（詳細は別記会則参照）

記念講演では、ニュースNo.14でもお知らせしましたようにチベットのシシャパソマに登頂を果たされた会友の林氏が熱弁を奮われ、中高年のヒマラヤ遠征とい

うこともあり会員のヒマラヤ熱をあおってくださいました。

総会次第は以下の通りです。

1. 会長の挨拶
 2. 前年度活動報告及び平成7年度活動計画／幹事長及び各幹事
 3. 会計報告
 4. 会計監査報告
 5. 会則の一部変更について
 6. 役員の一部変更について
 7. 新会長の挨拶
 8. 新山岳部長の紹介
- 【記念講演】 会友 林 孝治氏『シシャパンマ登山について』

《会則の一部変更》

旧 会 則	変 更 後 会 則
第4条（会員）本会の会員は、大阪市立大学（その前身を含む）山岳部出身者及びこれに準じるものとする	第4条-1（会員）本会の会員は、大阪市立大学（その前身を含む）山岳部出身者及びこれに準じるものとする。 第4条-2（賛助会員）本会は、会の目的達成に賛同し、かつ、会の事業に積極的に参加する意思を持つものを役員会の承認を経て、賛助会員として推薦することができる。
第14条（会費）会員は、総会で定める会費を納入しなければならない。	第14条（会費）会員及び賛助会員は、総会で定める会費を納入しなければならない。
第16条（会計年度）本会の会計年度は1月1日より12月31日までとする。	第16条（会計年度）本会の会計年度は、4月1日より3月31日までとする。

先日の総会にて、会長をお引き受けすることになりました。

長年、大橋会長にはご苦勞をお掛けし続けておりましたが、何時までもそれに甘えていることもできず、非力をかえりみず、会長に就任いたしました。

大橋会長は戦前、大阪商大黄金時代を築かれたお一人で、数々に輝かしい山歴をお持ちであり、又そのご交友も広く全国の山仲間知友をお持ちになり、経済界・大学当局にも多くの知己を持っておられます。

ランタン・リルンの登頂・四光峰遠征と度々の海外遠征に会長としてバックアップせられ、戦後の市大山岳会の活躍をご支援頂きました。

偉大なる大先輩に較べ、私には取り立てての山歴もなく、学外の山友は一握りの人しか知己を持ちません。

私は昭和21年、大阪商大予科に入学しました。同年山岳部に入部しましたが、鈴木先輩が卒業された後は、たった一人の山岳部でした。戦後の混乱の最中でしたが、それでも他大学山岳部は戦前・戦中派の方々もおられ、活動を続けておりました。大阪商大山岳部の戦前のめざましい活躍を知るに及び、何とか山岳部を復活させたいと願いました。

大阪商大はその後、大阪市大と拡大変化し、卒業前年の昭和26年には部員数も30数名となり、徐々に戦前レベルの山行に近づくことができるようになりました。当時私もヒマラヤを夢み、卒業後も夏・冬山にできる限り参加していました。しかし、昭和31年、胸部疾患のため入院することとなり、ヒマラヤへの夢はあきらめざるを得ませんでした。

昭和36年、市大第1回のヒマラヤ遠征は、森本隊長・大島隊員を失う悲劇に終わりました。しかし、その悲劇にくじけることなく、度々の遠征が実現できたことは、皆さんご承知の通りです。市大山岳会は戦前に続き、戦後諸君の活躍により第2の黄金時代を迎えることができました。これら活躍した諸君が未だ山への情熱を失わず、激務の中を寸暇を見つけて山行を続けておられます。

山岳会がこれらの人々の良き交流の場となり、時には戦前の大先輩もお見え頂き、活躍を続けていることは素晴らしいことです。幸い数年前より、大橋会長のご発案にて幹事長制が敷かれ、藤本君がその大役を引き受け、頑張ってもらいます。各幹事の諸君も役割分担し、山行きの企画や行事の準備・山岳会ニュースの発行など協力して頂いております。

山岳会にとって気掛かりは、山岳部がだんだんと衰退し、現在現役部員が唯一

人ということです。種々諸事情があるにせよ、これは余りにもさみしいことです。是非、山岳部員を獲得し、伝統を守ってゆきたいです。

今年は、山岳会の目標として、現役部員5名以上獲得を掲げました。早速、先日の幹事会で行動計画が打ち出され、部室のクリーンアップ・一般募集の山行きの定期開催・勧誘のためのPRを決め、動きつつあります。

今年より山岳部長には、我が山岳会員である小林先生にご就任頂きました。先生にもご協力頂き、嘗ての山岳部の復活を目指す所存です。

私には、伝統に輝く市大山岳部山岳会をますます発展させる使命があります。泉先輩・森本先輩らの輝かしい活躍、大橋前会長のご努力を引き継ぎ、活気ある山岳部山岳会にして、再びヒマラヤジャイアンツに遠征を送り得るようにするのが私の夢です。

皆様方のご協力をお願いして就任の挨拶とします。

会長を退くにあって

大橋秀一郎

私が栗飯原大先輩の後を受けて、市大山岳会の会長をお引き受けしたのは、たしかカンジロバ・ヒマールの登頂に成功したすぐ後の頃、昭和47年であったと思います。

泉隆次郎さんから例の調子で、強引に引き受けさせられた訳ですが、当時しばらくは会社の仕事が忙しい真最中で、何から何まで「最高顧問」である泉さんをお願いしているのが実情でした。

池永新会長は、私が会長に就任するより以前から副会長であり、実は私は栗飯原さんから池永さんへの暫定的なつなぎの会長の様な積りでありました。それがつなぎどころか二十数年も続いてしまい、何か申し訳ない様な気がしておりますが、漸くここで本命の池永会長が実現し、私としましては、会員の皆様にしても喜ばしいことであると思っております。

私の在任中、第3次隊によるランタン・リルンの登頂や数年前の四光峰登頂等、会員の皆様方の強力なご協力によって何とか成功に導くことが出来たのは、私として望外の喜びであります。この間、私個人としましては、山の友達、又それに係る幾多の友人を得たことは私の何よりの喜びであります。

私は今後この会長在任の間に得ました多数の友人を新会長にご紹介し、池永さんがお仕事をやっていきやすくするのが、一会員としての私の任務ではないかと思っております。

現役の山岳部の現況を見ます時、市大山岳会としても一つの節目の時機にさしかかっていることは事実であります。今更こんなことを申すのは私として無責任にも思えますが、今までのことにとらわれず、広い視野から今後の山岳会のあり方を探究して行かれることこそが、今後の山岳会に必要なことであると思います。

新会長池永さんは未だ会社のお仕事も非常にお忙しい時期ではありますが、それでも十分に会長職を果たされ得る態勢は二、三年前から整えておきました。

「幹事長」というのがそれです。幸い適役の藤本君がその職に引き続きついておりますので、十分やってくれると思います。

大学山岳会一般の沈滞の中ではありますが、やり方次第で将来の道は開けて行けるものであると思います。池永新会長のもとで今後、市大山岳会がますます飛躍発展せられます様、お祈りしますと共に、私の会長在任中、ご協力頂きました会員の皆様方に心からお礼を申し上げる次第であります。

近 況

小林治敏

前山岳部長の依田先生がこの3月をもって定年退職され、その後を引き受けよとのことで、4月の総会にてご承認を頂いたところです。皆様方もご存じのとおり歴代山岳部長に比べるものではありませんが、違いと言えば私が昭和45年に卒業した後も母校の教員として居残っていること、そして山岳部OBであることでしょうか。

この間山岳部監督もやらせて頂きましたが、年々山と無縁の存在になっております。ただ、海外出張の際はできるだけ山を見るというか、山に近づくというか、言わばバードウォッチングならぬマウンテンウォッチングを心掛けております。例えば、リオデジャネイロでの岩登り見物、ネパールではマナスル3山やランタン・リルン、ネス湖からのルートでスコットランドの最高峰ベンネベス、この5月末にはヨセミテヤコロラドの山々を楽しみにしておりますが、これを機会にぼちぼち山登りを再開しようかと考えております。

我が市大山岳部は次第次第に部員も少なくなり、会員名簿からも昭和60年以降

の凋落ぶりが目立ちます。どの大学も部の存続をかけた活動を行っていると思いますが、朱鷺あるいは伝承芸能・技術のように一度消えかけたものを再生するには莫大なエネルギーを注がなければなかなか可能ではなく、かといって妙案・奇策があるものでもありません。ただ幸いなことに山岳会としては諸行事も活発に行われていますし、池永会長、藤本幹事長をはじめとする諸先輩方の山岳部に対する熱い気持ちがひしひしと伝わっておりますので、これらを大切にしていけば徐々に山岳部の再生が可能ではないかと考えております。つい先日（5月11日）日大隊がチョモランマ東北稜の初登攀に成功との新聞記事が出ていましたが、昨今の大学山岳会・山岳部の衰退ぶりを考えればまさに欣快の出来事です。リルン、カンジロバ、四光峰と続いた市大の伝統を甦らすべく、皆様方のご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。

■△◆○総会欠席者の一言□▲◇●

<会員>

◆被災された方々に対し心よりお見舞い申し上げます。ご盛会を祈る。

<島雄淳一郎>

◆元気ですが、最近は山行もストップ。80才となり家内心配するためか？いつも出席しましたが、今回は欠席させていただきます。

<平野義明>

◆隣の全壊家屋の撤去が早くなり拙宅の修理、塀の新設等立会いで忙しくなりますので欠席します。悪しからず。

<中島喜一>

◆腰痛に悩まされております。順調に老化進行中か？ご盛会を祈っております。

<西村正己>

◆不覚にも今年に入って2度肺炎で入院しました。目下2度目の入院中です。大震災による皆様の様子を気にかけ乍らも本人がこの様で真に申し訳なく痛感いたします。

<富村恒次郎>

◆阪神大震災の時、早速にお見舞いの電話を頂き、ありがとうございました。私共揃って怪我もなく、家屋無事だったこと、何よりの幸せと感謝しています。後片付けは一応終わりましたが、部分的に壁（ひびが入ったり、すみが壊れたり等々）の修理はこれからです。只今職人さん不足で遅れています。

<白井順三>

◆もう高い岩や氷の山は駄目なので、スキーと暮、ゴルフを練習してます。冬期は五竜・八方方面で滑っています。

<馬野庄二>

◆拙宅も全壊のため、現在再建中で別記仮住所です（9月頃まで）。以後は従来の住所に帰る予定です。 <信濃義彦>

◆藤井寺市庁舎の工事現場です。現場作業のスケジュールと合わず、申し訳ありません。皆様によりしくお伝え下さい。 <荻野昌宏>

◆平成6年6月28日をもって近畿銀行ー近畿リースを経て定年退職致しました。目下のところ一寸した園芸、山歩き、詩吟の会という状況です。皆さんによりしく。 <林日出雄>

◆いつもの事ながら事務局の方達には大変お世話になり、ありがたく感謝しています。2月東京西郊の景信山、明王峠に「新ハイキング」のルートを訪ね、帰途栃谷温泉の松風呂に浸かって帰りました。これより駅まで3km、又々歩いてくたべれました。 <堺 皓二>

◆1995年Jan. 末にジャカルタの国営TV放送局（NHK担当）に赴任する予定で、旧友先輩の来印されることをお待ちしております。Telemaksi. <薩摩逸雄>

◆大学はゼミスターの導入で、4月5日(水)入学式、4月7日(金)より授業開始、7月末に前期が終了します。そんなことで多忙のため、欠席させていただきます。皆様に宜しくお伝え下さい。 <中井 博>

◆残念ですが先約があり、出席できません。退院後は完全に元気です。ご安心下さい。 <西田 新>

◆東京勤務も5年になりました。失礼ばかりで申し訳ありません。 <近藤哲也>

◆竣工式と重なり出席出来ないのが残念ですが、皆様によりしく。またこの度の阪神大震災、仕事柄考えさせられるところ多々有ります。被災された方々に心からお見舞い申し上げます。 <上堂竹壽>

◆皆様にお会いできないのが残念です。申し訳ございませんが都合により欠席させていただきます。盛会になることを祈念申し上げます。 <小笹 孝>

◆4月4日ー14日の間モスクワと中央アジアに出張の為出席できず、皆様に宜しく。 <伴 明>

◆63才ともなり腰痛に悩まされています。しかし、雲のついた高山を見たく、先般は北海道の列車に乗って来ました。3月末には白馬山麓に行く予定をしています。 <橋本九二男>

◆地震被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。瞬時にして全てが崩壊！人間の原点とは何か？を考えさせられます。今年はカンジロバ初登頂25周年になります。万博のテーマの具現化の一策として申し出た、初の日ネ合同隊を英断をもって送り出して頂いたことに、終生ご恩を忘れるものではありません。

<常慶和久>

◆雪の中、15才を頭に6人の子どもたちと炭焼きしています。真っ白、白銀の世界に、一点炭焼き窯、真っ赤、黄金、白色に輝く。 <大森昌也>

◆阪神大震災、ご関係の方にお見舞い申し上げます。当方北海道に勤務して9年経過。元気でやっております。欠席しますが、ご出席の皆様によろしくお伝え下さい。 <上田忠士>

◆阪神大震災で罹災された諸先輩等会員の皆様には心からお見舞い申し上げます。決算時期に当たり欠席致します。 <澤田宗博>

◆改めて阪神大震災に関し、心からお見舞い申し上げます。 <渡部教行>

◆桜の季節に九州の福岡へ転勤予定です。5月連休には、自宅住所も移します。また宜しく願います。2年2期計4年間JACの役員を勤め、やっと今5月の総会で引退できる予定です。 <片岡泰彦>

◆去年も今年も変わらぬ快眠の日々です。皆様のご健康をお祈りします。 <西沢裕子>

◆以前から参加する予定の、スキーのSLのレースが丁度その時あるので、欠席させていただきます。 <奥田尚志>

◆今年は3月まで仕事に忙殺され、山には殆ど行けませんでした。この時期は雪国の短い山スキーシーズンでもありますので、今回は欠席させていただきます。すみません。 <青島 靖>

◆95.1.3ランタン・リルンBCに行き、森本・大島氏の記念碑にリング1コ、カロリーメイト(チーズ味)2本、あめ1コをお供えしてきました。BCから見るランタン・リルンはとてもきれいでした。12/31~1/5 シャブルベンジ→Remchhe→Chadam→langtang→BC→キャンジュンゴンパとトレッキングしたところで、一緒に行った人が高山病で倒れ、アーミーのヘリコプターでカトマンズまで下ろしました。 <山本 新>

<会友>

◆当日宝塚造形芸術大学の役員会がありますので、残念乍ら欠席させていただきます。 <國本清茂>

◆日本山岳会よりマカルー登山に参加しております。 <重廣恒夫>

◆地震全壊。3月中旬~下旬解体予定。以後放浪生活。

尋ね先： 田中又は及川 03-5245-0511 <住吉仙也>

◆息子が開業して、私が Retire! <原田直彦>

◆4月から別記に変わります。今の自宅もそのままです。 <依田恭二>

平成6年度 活動報告

企画運営幹事

(佐々木・藤村・西村)

- * 4月16日(土) 第2回「初登頂 大いに語ろう会」 (責任者: 福山)
~17日(日) 四光峰初登頂5周年(4月21日)
(比良山高津山荘) 藤本夫妻・佐藤・奥田・和田・福山・武部
小倉・尾形夫妻 計10名
※鍋料理に、アルコール、5年ぶりの登頂話に
花が咲く。山小屋での語らいは格別の味。
- * 4月29日(金) 第2回立山の自然の旅 (責任者: 佐々木)
~5月5日(木) 三島夫妻・山本・藤本夫妻・上堂・久保田
(立山 室堂 山辻・岡本夫妻・佐々木・藤村・島川親子・
雷鳥荘) 大島 計15名
※天気は昨年同様、不良。辛うじて、別山アタック
と剣沢の遠見の偵察に成功。温泉の味は言うことなし。
- * 5月29日(日) 第103回大阪市立大学ボート祭 (責任者: 八木)
(桜ノ宮 大川) 川勝・清原・上堂・岡本・苑樹・奥田
島川・大島・西村・福山・八木
藤川(苑樹友人)・中島・柳川・藤井・倉橋(日立)
<1回戦> 計16名
※リルン1号(川勝・上堂・島川・大島・倉橋) 2位
リルン2号(清原・藤川・苑樹・西村・柳川) 1位
<2回戦>
リルン2号(清原・福山・倉橋・中島・浪速高校) 3位
ボート祭参加4年目にして、悲願の初勝利。参加者全員で
勝利の美酒に酔いしれた。来年は2回戦突破だ。
- * 9月15日(木) 比叡山横断(修学院~比叡山~坂本) (責任者: 西村)
川勝夫妻・藤本夫妻・山辻・西村 計6名
※お天気に恵まれ、敬老の日に相応しい、快適なハイキング
となり、しこたま汗をかいた後のビール、手打ちソバが
美味しかった。
- * 10月8日(土) 永田文康君を偲ぶ会 (責任者: 福山・大島)
~11日(火) 三島夫妻・小林静子(三島友人)・川勝夫妻・藤本夫妻
富山県・馬場島 小笹・上堂・久保田・佐々木・藤村・山田・奥田・廣瀬
大島・澤田・西村・福山・和田・会友大堀・竹中夫妻 計23人
※23年前に22才の若さで、池の谷に逝った永田君を
偲んだ。80才で今なお元気な小林さんの話に全員
聞き惚れた。10日の午前9時に7人が剣岳頂上に立
ち、20数年ぶりの感慨を味わった。
- * 11月13日(日) 第2回バードウォッチング (責任者: 西田)
交野市 川勝・門田・藤本夫妻・西田夫妻・上堂・岡本夫妻
市大附属植物園 藤村夫妻・島川夫妻・大島・西村・会友稲垣・宗實
計17人
※自然美に溢れた植物園での、14種の野鳥との出会い。
話題満喫の昼食。最後は獅子窟寺での国宝薬師如来像
に参拝して、有意義な一日が終了した。

年間延参加人員 87人

平成7年度 行事計画(案)

企画運営幹事

(佐々木・藤村)

- * 4月29日(土) 第3回自然の旅 (責任者:大島)
～5月7日(日) 山岳部新入部員歓迎会(予定)
- * 5月28日(日) 第104回大阪市立大学ボート祭 参加
(2クルー参加の予定) (責任者:清原)
- * 8月 北海道自然満喫の旅 (責任者:上田)
- * 10月 穂高紅葉散策の旅 (責任者:福山)
- * 11月 第3回「初登頂 大いに語ろう会」 (責任者:奥田)
カンジロバ峰初登頂25周年(11月7日)
- * 12月 第3回バードウォッチング (責任者:藤本)

なお、東京支部においては別途、行動計画をたてる予定です。

★ 会員の皆様の積極的なご参加をお願い致します。

★ 総会にはご参加できない方もお気軽にお越しください。

★ ご要望やご意見がございましたら事務局または幹事まで

お願い致します。

* * * *

第 3 回 立山自然の旅

* * * *

総 括

幹事：佐々木・大島

今回は4月29日～5月6日の7日間に、現役部員2名、東京支部、家族の方、また会友の方等幅広く多くの方々の参加を頂き、後半の好天にも恵まれ、登山・スキー・温泉・酒と充実した自然の旅を楽しんでもらえた事と思います。各々次回への課題も多く持たれた様で、今後トレーニングに励んで頂き、より盛大な行事が計画できます様宜しくお願い致します。

参 加 者：（ ）内は卒業年度。

山本（S30）、藤本夫妻（S34）、上堂（S35）、小笹（S35）、久保田（S36）、
山辻（S38）、伴（S38）、佐々木（S40）、丸子（S41）、山田夫妻・子息（S42）
島川夫妻（S43）、奥田（S44）、宮崎（S45）、大島（S45）、兵頭（S48）、
高尾（H7）、吉元（3回生）、沈（2回生）、
宗實夫妻、小寺（会友）

・・・述べ25名

行動概要： 詳細は各自の感想文をご覧ください。

1. 現役隊

4月29日～5月2日 劔沢T S（吉元、奥田、高尾）前劔、奥大日岳（5/3）
5月3日～5月6日 雷鳥沢T S（沈、高尾） 別山、立山三山

2. シルバー隊

4月29日～5月2日 劔沢T S（山本、上堂、佐々木、大島） 前劔
5月3日 曇 雄山（一ノ越より往復） 島川、他は酒盛・温泉
5月4日 晴 ①劔本峰アタック迷走隊 伴、兵頭

②別山・立山三山10時間隊

宗實夫妻、藤本夫妻、丸子、宮崎、大島

③別山乗越アタック隊

山辻、山田夫妻・子息、島川夫妻

④雄山谷スキーツアー隊

小笹、久保田、小寺

5月5日 快晴 立山高原スキー隊 伴、丸子、山田親子、宮崎、
大島、兵藤、宗實

5月6日 快晴 東京組（扇沢へ）、大阪・現役組（立山駅へ）下山

劔岳本峰アタック隊

兵頭 渉

1995年5月4日 曇 ガスなし、稜線は烈風 パーティー：伴 明&兵頭 渉

04:15 雷鳥荘出発

薄明かりの立山連峰に包まれて勇躍出発。クラストした雪面が久し振りの心地よい緊張を靴底から伝える。

04:30 雷鳥平通過

雪渓上で3羽の雷鳥が争っている。巣作りの場所争いか、パートナー争奪戦か、静かな雪谷に、羽音と鳴き声が吸い込まれていく。

06:30 稜線に出る。

烈風に妨げられつつ伴さんと現在地確認を試みるも不明。別山乗越か否

07:30 大島パーティーと突然の遭遇

ここはどこ？

08:30 別山乗越

劔はるか、回り道のお蔭で2時間のタイムロス。

劔に最短距離をとるべく劔山荘へ大トラバースを試みる。

周期的に吹き下ろす強い風に、雪面に身体を寄せてバランスをとる。強風のため思うほど稼げず、方針変更して劔沢山荘へ向かう。

10:00 劔沢山荘

劔を正面に見ながら遅い朝食をとる。暗い雲を背景に本峰が、ハツ峰、源次郎尾根、別山尾根を従えて聳えている。本峰の雪帽子のスカイラインに多くの人影を双眼鏡で捉える。源次郎尾根上に数パーティーがいる。下部雪面のパーティーは今日中に本峰に到達出来るのだろうか？

10:30 出発

別山乗越から滑り下りてくるスキーヤーを眺めつつ単調な登り、奥田氏の昨夜のコメントを一瞬思い出す。

上部からスキーが一本流れてくるのを拾ってあげた。ゲレンデスキーではストッパーに取って変わられた流れ止めが、山岳スキーでは必需品のようだ。

12:00 別山乗越

乗越直下で槍、穂高を遠望する。上空の雲は厚いが、アルプスの山々は良く見渡せる。スキーヤーやスノーボーダーの、クラストした沢を軽快に滑降していく人、転倒して下部まで流されていく人、様々な様子をながめながら雷鳥沢を下る。クサリ始めた下部雪面でアイゼンをはずす。最後の100mの登りのきついこと、次の劔の1日アタックを期して、トレーニングの必要性を痛感、ビールが欲しい。

14:00 雷鳥荘到着

’95年5月立山縦走の思い出

宮崎多一郎

〔はじめに〕

そもそも大学卒業後、本格的な山に登ったのは、永田君の劔岳遭難救援隊として、卒業した年の11月に劔・早月尾根に登った位で、その後は、仕事の都合(??)、家族の反対等でスキーやハイキングしかやっておらず、すっかり山を忘れていた。再び山に戻る決心をさせてくれたのは、今年2月の山岳会東京支部の夜の集まり(伴さん、西村君、奥田君の歓送迎会)での盛り上がり。酒の勢いもあり、丸子さん始め、皆の前で立山山行を宣言、兵頭君の車に便乗し、一路立山に向かう事になった。なお、多摩からはるばる茨城(守谷町)、千葉県(流山、泊)まで迎えに来てくれた兵頭君にはこの場を借りて、心からお礼を言いたい。

〔東京ー立山〕

5月2日(火)深夜、ようやくたどり着いた中央道(八王子インター)を徹夜で走り、大町市の扇沢に着いたのが、5月3日(水)7時前。トロリーバス、ロープウェイ、ケーブルカー、トロリーバスを乗り継ぎ、黒四ダムサイト以外殆ど歩かずに室堂に到着。缶ビール2ケースの重い荷物ではあるが、わずか30分の道程を、兵頭、丸子、宮崎交代でボッカ、昼前に雷鳥山荘入り。現役時代と比べると、情けない感じもした。山荘では、大阪組と合流し、ラーメン、ビールの昼飯。昔話に花が咲いた。午後兵頭をコーチに、現役、若手と久しぶりに雪上訓練。昔の勘と自信が少々蘇る。

〔立山縦走〕

5月4日（木）曇り、強風（飛ばされそうになりながらの山行）

大島、丸子、宮崎、及び藤本、宗實両ご夫妻の7名パーティーで立山縦走に挑戦。雷鳥荘を早朝4時半に出発し別山乗越を目指す。藤本、宗實グループは、アイゼンを装着したが、我々3人グループは、前日の雪がさくさくで、アイゼン不要と読み、アイゼン無しで出発。しかし、この日は、気温が下がり雪が凍結していた為、雷鳥沢への下りでツルツル滑りながらの歩行を余儀なくされ、最初から消耗。読み違いを痛感した。止むを得ず、別山の取付でアイゼンを装着し、雪の斜面を登り始めた。藤本グループに遅れる事約10分、予定の2時間で無事、別山乗越小屋に到着。立山、大日、剱岳のパノラマを俯瞰した後、小屋で朝飯の弁当をかけた。

休息の後、7名で出発。別山の雪の急斜面をトラバースし、真砂岳に向かおうとする時、先に出発し剱岳を目指していた筈の、伴・兵頭隊とバッタリ出くわす。雷鳥沢からの取付を間違えたとの事だが、時間のロスは相当なもの。今日中の剱岳往復に黄信号！2人を励ました後、稜線を歩く。稜線は風で雪が飛ばされ、かなり夏道が出ており、アイゼンをカランカラン響かせながら歩く。日頃の鍛練不足の我々若手（？）組は、少し歩むとゼーゼーさせ、小休止の連続。正に牛歩そのもの。一方の熟年組は鍛え方が違うのか、元気一杯。途中真砂岳の支稜からのエスケープも心配されたが、先輩が後輩を励まし、ようやく昼前に雄山の頂上に全員立つ事ができた。

剱、大日、後立山連峰はもとより、遠く、槍ヶ岳を望めた時は、疲れも吹き飛び、全員手を取り合って、喜びを分かち合った。今回は5月の山というよりも、強風と低温で（一ノ越の正午で、マイナス4度）殆ど、冬山の状態であった。

苦労もしたが、この厳しい天候で予定通り縦走できたとの満足感は、何事にも代えがたいものであった。

〔立山縦走記録〕1995年5月4日（木）

メンバー：藤本・宗實両ご夫妻、丸子、大島、宮崎

4:30 雷鳥荘出発 6:30 別山乗越小屋（朝食） 7:30 別山登り口

8:30 真砂岳 10:30 富士の折立 11:20 雄山頂上

12:30 一ノ越山荘（昼食） 13:15 出発 14:30 雷鳥荘到着

〔付録〕

た： 沢山の思い出。 '95年5月立山雷鳥荘の集い。

て： 天気に恵まれて。 室堂－弥陀が原、楽しかった山スキー。

や： やったぜ！ 強風下、別山－真砂岳－雄山縦走。

ま： 迷い道。 来年も挑戦！ 剡岳本峰アタック。

初めての立山

山田明美

5月4日8時、別山に向けて雷鳥荘を出発しました。メンバーは山辻氏、島川夫妻、それに主人、息子（12才）と私、6人のパーティー。まずまずの天候に恵まれた朝、私にとっては初めての登山。一度は果たしてみたいという思いと、雪山に登るなどできないのではないかという不安の入り混じった出発でした。案の定、5分も下らないうちに右足の膝が少しがくがく。なんとも足もとのおぼつかない姿に、Mr.山辻が後ろから足の踏み方、歩き方を教えてくださいなのですが、手袋も持たずよろつく姿に、「山田はえらいスパルタ教育するんやなー」と手袋とピッケルを渡してくださり、やっと少しずつ前進することができるようになりました。また、島川夫人も私のペースにあわせてゆっくり前進してくださいました。

周囲から「ごっついええ景色やないか」と言われても、滑らないように自分の足もとを見るので精一杯で、たとえ山頂にたどりついて、今登ってきた急斜面を下ることなどできるのかしら、とますます不安はつのるばかり。それでも、やっと山頂に到着した時は、「やったー」という喜びでいっぱい、と言いたところですが、実際は「あー、着いた」と頭の中がぼんやりした状態でした。

ふと、我に返り、頭を上げてみれば、目の前には素晴らしい景色が広がっていました。山肌の残雪と藍色のコントラストが生み出す個性あふれる表情や、さらに遠くの山々が影絵のように幾重にも連なり、ひとつの美しいパノラマの世界を作り出す様子など、山頂から始めて目にする山々はそれはそれは美しいものでした。

山頂でのひとときを楽しんでいる間もなく冷たい突風が登山者を追い払うように吹き荒れ、波々、山を下りよう、ということになりました。

案じていた難関の急斜面をやっとのことで下りきったところで、やはり一気に下山してしまうのはもったいない、ということに全員賛成、ピッケルで斜面にわずかばかりのステップを作り、腰を下ろして昼食をとりました。スキー板を担い

で登ってくる人々の好奇の目にも負けず、ひたすら優美な山々を見ながらの早弁でした。

後半は、痺れを切らした男性陣、野うさぎのように走って下山してしまいました。

息子ともども、楽しい立山自然の旅に暖かく迎えてくださいましたメンバーのかたがたに、この紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

雄山谷 滑り込みセーフ

小笹 孝

去年は、春からのバタバタ騒ぎで立山とも御無沙汰してしまい2年振りとなりました。常願寺川の川音も一際大きく歓迎の意を表してくれています。雨の近い空模様の中で、樹々の緑がその後ろの高みの雪の白さと共に目に優しく映ります。

ここ数年の立山行きは、山登りではなくスキーを楽しむ為のものでした。そしてまた今回も、旧い山仲間との久しぶりの山での出会いにも関わらず、唯々滑ることのみを心に描いての、ピッケルもアイゼンも持たないままに参加をさせて頂きました。

しかし、5月の立山にまで初めてスキーに来た頃は、3ツ道具の音を響かせる「山家さま」に擦れ違った時などは、気後れにも近い何とも形容し難い気分になった記憶が今も実に鮮やかであり、その頃にひき比べ、この横着さの拠り所はいったい何なのかと我乍ら訝しい思いも致します。

ワイワイがやがや。宴会部屋はなかなかの盛況であります。足の衰えたもの未だ衰えざる者入り混じる中で、お酒飲むくち話す口その肝心な口自体が衰えた人は殆ど見当たりません。楽しく楽しく時間が移ろいます。

明日あー 天気に なーれッ

我が仲間の「山家さん達」が出発した随分と後ろからスキー組の3人（久保田さん、小寺さん、私）も漸く行動開始です。

久保田さんのスキー熱は、我が日本国のみならずニュージーランドのインストラクター資格も併せ持つ息子さんの刺激を多分に受けているとのことであります。

小寺さんは'91年のランタン谷墓参行にも参加され、そのスタミナには皆が驚かされたものでした。最近では山スキの講習ツアーにも参加される若さの持ち主であります。

昨夕、急遽まとまった3人組は、年令の平均値は高いものの、バラツキはスキーテクニック同様に殆ど無いという理想的なパーティーであります。

ゆっくり楽しく行きましょう。

高曇りの天候は一抹の不安が有るものの、遠目の利くまずまずのもので、一ノ越へゆっくりと向かいます。

峠が近づくとともに元気なのは小寺さん1人となり、野郎2人は結構フーフー言わされてしまいました。

鞍部に立つと、風も強く気温もかなり低いことながら黒部源流の山々が目の前に懐かしく、赤牛岳がゆっくり大きく蹲っております。

雄山谷は広くゆるやかにうねっており東一ノ越下方で左に大きく曲がった先からは見えません。唯、大きな高度差が楽しい滑りを暗示してくれているようです。

さー 参りましょうーッ スピードは控えめにデスヨ

峠からの下りは、もう10時にもなっているにも関わらずカリカリのクラストで、波打つ斜面が足に響きます。

今日の予定コースはタンボ平をロープウェイの黒部平駅まで滑る積もりでありましたので、東一ノ越へのトラバースルートを目で追うもののシュプールも踏み跡も全く見当たりません。

一ノ越から黒部側へと下るスキーヤーは結構多いのに東一ノ越へのルートを辿る者は誰一人なく、そのまま雄山谷を真っ直ぐに下って行ってしまいます。何故だろうと、タンボ平ルートを固執することに些かの不安を覚えて参ります。

一方、雄山谷を滑って途中で雪がなくなって長い距離を歩く羽目になる事も嬉しくありません。

迷ったあげく、これだけ誰もタンボ平へ行かないのはきっと状態が悪いことが彼らにはわかっているのかも知れないと思い、我々五十にして則を越えない3人組は東一ノ越も越えることなく大勢に従いました。

イージーやなー ハイ イーオ爺ですー

下るに従いクラストも緩み、快適な滑降を楽しむ内に何時しか瀬音が聞こえだしました。しかし今年は雪が多く、結局黒部湖との出合までスキーを脱ぐことな

く無事に着くことができました。

沢の流れを聞きながらお弁当を開けるのも幸せがいっぱいです。

立山・黒部・大町ルートのお蔭で残雪期の山のお腹の中に入り込むのも本当に楽になりました。オジンには有り難いことです。

そして、スレンダーパンツにリアーエントリーのお嬢様までがこの秘境に滑り込んで来るのもまさに時の流れなのですネー。

天気荒れないことを！ シーハイル！！

弥陀ヶ原スキーツアー

兵頭 渉

1995年5月5日

08:30 雷鳥荘出発

昨夜から降り続いた雪が十数センチ積もり、天気は急速に回復。理想的なスキー日和、8名で雷鳥の姿を見ながら室堂ターミナルへ向かう。

09:30 室堂ターミナル

室堂～天狗平： 斜滑降が一部あるが、コースの大半はスキー歩行と緩い滑降。振り返り見る剱・立山連峰の雄大な景観は、山にいる幸福を味わえる。

天狗平～美松坂： 殆どが斜滑降。美松バス停への斜面は滑降に最適。この斜面は午後の楽しみ、斜滑降を続ける。

美松坂～弥陀ヶ原： 弥陀ヶ原ホテルを眼下に見て、斜滑降から樹林帯へ。気温の上昇と高度低下で新雪がクサリ始め、重い雪に足をとられながら樹林帯を抜けて弥陀ヶ原バス停へ。

弥陀ヶ原より下部は滑降禁止（事故・遭難が頻発のため例年禁止）

12:00 バスで室堂ターミナルへ戻り、昼食。

13:00 室堂ターミナル

室堂～天狗平： 午前と同じコース

天狗平～美松坂： 美松バス停への斜面を快適に滑降。

14:45 美松バス停より室堂ターミナルへのバスをバス会社の係の人に仕立てて貰い、帰路につく。

〔お勧めプラン〕

天狗平～美松がスキーコースとして適当。（滑降所要時間20分～60分）

スキーバス（美松→天狗平 所要時間10分。1時間に1本位）をリフト代わりにして1日4～8回滑れる。

昼食は天狗平でとるのが良い。室堂は通過観光客でレストラン、食堂は大混雑。レンタルスキーは早めに宿に申し込んでおくとな適当なサイズが予約できる。スキー金具の調整を出発前に行うとともに、調整工具（+/- ドライバー）を携帯。

〔参 考〕1995年スキーバス時刻表（立山開発鉄道 室堂駅 Tel0764-65-5768）

弥陀ヶ原	美 松	天狗平	室 堂
8 : 35	8 : 40	8 : 50 (止)	—
9 : 15	9 : 20	9 : 30 (止)	—
—	9 : 55	10 : 05 (止)	—
10 : 35	10 : 40	10 : 50 (止)	—
11 : 35	11 : 40	11 : 50	11 : 55
13 : 15	13 : 20	13 : 30 (止)	—
—	13 : 55	14 : 05 (止)	—
14 : 35	14 : 40	14 : 50 (止)	—
15 : 20	15 : 25	15 : 35	15 : 40

感 想

宗實慶子

考えてもおりませんでした地震の奴に家を壊され、生き方が変わりました。市立大の若い皆様に優しくして頂き、私共二人この上なく幸せです。この度のスキーで伴さんの後を滑れるなんて、夢にも想っておりませんでした。岳は素晴らしい。年をとる事を恐れません。

新人ヤロウの……

おーちゃくなほほえみ

GW山行について書くように言われていますが、新鮮味あることもあまりありませんでしたし、雨は降るし、頂上行かなかったしと、印象深い山行でなかっただけに、高校生の時、小論文模試で偏差値70以上とったことある（自慢）ボクでも、何を書けばよいのかわからないのです。例えばここで、あの『立山からチベットへ』のプロローグのような室堂周辺の景色を感動的に伝えて、剡岳に登った感動をそのまま文章にするような無難な紀行文にすればよいのですが、そのような表現力ありませんし、どうもボクのキャラクターに合わないのです。自己顕示欲が高いので、自分の自慢をしまくる文章こそ、ボクにあっているのであります。

ところで、自己顕示欲で思い出しましたが、ボクは自己顕示欲の強い人々が大好きです。初夏の上高地で、水着姿で散歩する金髪の女性、超短い短パンと水着の胸あてだけで、不動岩周辺をうろつく外国人の女性クライマー等々、彼女らを見ると非常に元気が出るものです。こう書くとボクがただのスケベなやつのように見えますが、そんなことないです。ゲレンデでトップレスで登る筋肉マンの男性クライマーにも好感もてますし（ホモじゃないよ）、いかにも岩登り帰りという恰好で（メットぶら下げ、ハーネスつけて、ザックにザイル外装して）涸沢から下山してくる登山者集団を見るのも大好きです。だってカッコイイですもんね。一番好きなのは、隣近所のテントの人々と、山行の自慢をしあう人達です。去年は雨でテントが水浸しになったものの、自分の方は、テントの中が洪水でマットが浮いて大変だったのだと言っても、カラカラと笑いあい、過去の健闘を讃えあう山ヤさん達の会話を聞いては、山ヤ入門講座受講中のボクは微笑むのです。うーん、素晴らしき哉。人の多いテントサイト……。向こう三軒両隣、ホントの山ヤに囲まれて、こっちも黙っていればグレイト山ヤ、挨拶がてら、ときにロープをちらつかせつつ、一人前のふりをして、いっしょにカラカラ笑うのです。

人が多ければ多いほど、ボクの自己顕示欲も充実するのですが、今回のGWの室堂ではちょっとまいっちゃいました。山靴を打ち鳴らして観光客の中をねり歩く山の主役の登山客となるつもりが、室堂の主役はなんといってもアルペンルートハイカー達。そして、もっとも苦手とするスキーヤーに観光客の視線を奪われて、ボクは得意の自己顕示欲も発揮する暇もなく、観光客にもみくちゃにされて、いつもの迷惑そうな視線を向けられるのです。その視線こそ私の求めていた

ものよ！とばかりに、パワーを貯めようとするものの、仲間のはずのスキーヤーにまで裏切られ、ボクはすっかり小さくなってしまいました。別山乗越を乗越してなんとか剣沢のテントサイトにたどり着いた時には、人の少なさにホットしてしまいました。

翌日からの穴堀り&ゴロ寝生活は、雷鳥の鳴き声のような今回のGW山行を象徴するものとなりましたが、前剣からの本峰の圧倒的な山容から受けた感動と、山岳部流のテント生活は、ボクのこれからの山行に大いに役立つものとなることでしょう。そして、大先輩の方々の様々なお話は、なんともボクの訳のわからないまでの意欲をかき立てていただきました。

と、この文章自体終わりかけていますが、本当に終わっちゃいそうです。実に書くことがないのです。ゴメンナサイ。いつもなら（山行会どたぐつの文集では）もっともっと引っぱれるのですが、まだ不慣れな場所ですし、何を書いているかわからなくなっちゃいましたので、とりあえず終わります。最後にボクは山登りの意欲はあるのですが、なにしろ未熟者ですので、何かのはずみでボクのやる気が消滅しちゃう前に、いろんな所へ行く機会を与えて下さいませ。暇だけはもてあまして現役学生をやっておりますので・・・。

山行会どたぐつ部員で

山岳部の新人部員になっちゃいそうな

吉元謙介 であります。

初めての山登り

私は中国の江南に生まれ、故郷のまわりにあるのは平原や水田だけで、山があるとしてもせいぜい高さが300から400m位の小さい山に過ぎない。しかも階段つきで山登りと言うよりビル登りの方がふさわしいと思う。それにしても、子供の頃からの私は山登りを好きになった。どうしてかと言うと、山の頂上であるこそ、下より遠い方が見える。下では見られない風景が見えると言うのだ。

私は中国にいる時ではもう既に小説や雑誌などから日本は山の多い国である事を知った。富士山や北アルプスの大雪に覆われている山の写真を見るたびに「ああいう山を一度登ったら何よりの事」だと考えた。しかし、あの時の私はただの夢を見ていることをわかっていた。それで、2年前に私は1人の私費留学生とし

て日本に来た。しかし、勉強やアルバイトの方が忙しくて、なかなか山へ行く時間がなかった。そして、大阪市立大学の山岳部に入るまで2年半の時間は水のよう流れてしまった。

翌日の朝、準備として室堂のそばにある展望台に登りました。一緒に行った高尾さんの話によるとほんの少しの準備運動に過ぎなかった。しかし、私にとってはとてもしんどかった。

いよいよ3日目の朝になった。前の夜で今夜の行動がハードであることを既に知ったが、あれほど厳しかったとは全然思いつかなかった。朝5時半に出発して、雷鳥沢から登り始めた。ちょうど前の晩は雪が降ったので、強い風のせいで吹雪になってしまった。山の上では、もししっかり立たないと風に飛ばされるかもしれないと私は考えた。正直に言えばあの時の私は本当に少し後悔した。しかし苦労して頂上まで登っていて、下のきれいな風景を見ると、先の不快や体の疲れなどすっかり忘れて登山の真味を味わうので夢中になった。

この間の登山は私の一生の中で忘れ難い事になると思うが、先輩の方々の助けや援助など頂きまして、本当にありがとうございました。

大阪市立大学工学部2回生 沈 睿冰

GW山行記録

劔岳北方稜線

尾形達也

メンバー：尾形達也、矢倉 睦

4月29日（土） 夜行「きたぐに」で離阪。

4月30日（日） 曇のち晴

宇奈月から県警に電話で入山の報告を済ませてから出発。雪の無いスキー場から宇奈月尾根に取り付く。僧ヶ岳までは夏道があるが、林道と分かれる辺りより雪が現れ、標高1,000mを越える頃よりほぼ雪の下となる。1,200m付近にあるはずの避難小屋は見当たらない。

別に取り立てて問題の無い樹林の中の尾根を辿る。僧ヶ岳の一つ手前のピークの北側の広い台地でテントを張る頃には、青空が広がり後立山連峰のパノラマが黒部の谷の雲海の上に広がった。

5月1日(月) 雨

出発して1ピッチ歩いたところで雨が降り出す。北駒のピークで単独行の男性を追い越す。駒ヶ岳登りではブッシュがうっとうしい。真新しいゴアのカップパの消耗が気になる。尾根の上はブッシュに覆われているが、左側は雪庇を形成する雪面がへばりつくようにして続いている。雪の上は歩きやすいが危なっかしく、ブッシュとの間を適当に渡りながら進む。途中で沈黙中のパーティーを追い越し、サンナビキ山の手前で時間は少し早いがテントを張る。

5月2日(火) 雨のち曇

雨および風が強く、いつも通りの朝食はとったもののテントの中でゴロゴロしつつ半日を過ごす。昼前より雨足が弱まってきたので出発する。サンナビキ山の登りはブッシュがうっとうしいが、下りは快適な雪面を歩く。次のコルから小ピークが連続する。最初と次のピークは雪壁をそれぞれ簡単に登れる。2つ目のピークから次のコルへは短い懸垂下降を混じえてブッシュの中を下降。3つ目のピークはブッシュに半ば覆われた岩峰で右側の雪面から巻く。尾根上に戻ったところで痩せたブッシュ混じりの岩稜を20mたどり、懸垂2ピッチで深く切れこんだコルに降り立つ。次のピークがウドの頭だ。

5月3日(水) 曇のち雨

尾根の右側の雪面より取り付く。雪面がずたずたに切れており、右に左にうろうろしつつ登る。雪が薄く不安を感じたので1ピッチロープを出した。ウドの頭からはブッシュと雪面の間を出たり入ったりしつつ下降する。下り切ったところが平杭乗越で広い雪のコルには先行パーティーの幕営跡があった。毛勝山への登りは「天国への坂道」と呼ばれる雪の斜面であるが、雪の安定したこの季節では全く不安は無く、すいすい高度を稼ぐ。この頃よりガスで視界が閉ざされ、雨がパラつき出す。毛勝山から猫又山までは快適な雪の尾根であるが、先行パーティーは雪庇の存在を無視したかのようなトレースを刻んでおり、あまりの大胆さにあきれる。猫又山からの下降は広い雪の斜面となっており、ホワイトアウトの状態ではルートファインディングが難しい。コンパスで見当をつけて下り出すが、トレースがあったので迷うことはなかった。雪の斜面はやがて尾根の形状を成してきて高度を下げるにつれてブッシュがうるさくなってくる。ブナクラ乗越の少し手前で幕営する。

5月4日(木) 曇

夜冷え込んだせいで雪面が固い。今回の山行で初めてアイゼンを着ける。ブナクラ乗越までは急な雪壁をクライムダウンする。赤谷山へは広い雪の尾根を快適に高度を稼ぐ。赤谷山の頂上からは赤谷尾根を登ってきたパーティーが白萩川のピーク付近にいるのが見える。ここから白ハゲまでは快適な雪稜となっている。大窓への下降はところどころに短い垂壁のある雪面を下降、半ばまで下りると夏の池ノ谷ガリーのようなガレ場となり、大窓に到る。池ノ平山への登りは夏道が殆ど露出していた。急登を登り切り北峰の直前で行動を打ち切る。

5月5日(金) 雪のち晴

昨夜から降り出した雪が明け方にはさらに激しく降り出した。いつもの時間に起きたもののすぐシュラフに戻り朝寝を楽しむ。天候が回復してきたので正午頃出発。複雑な形状の雪稜にふかふかの新雪が積もり危なっかしい。ロープを2ピッチ出す。池ノ平山からの下降は以前は急な雪壁を小窓まで一気に下ったが、今回は小岩壁が所々露出しており、途中懸垂下降を2ピッチ行う。小窓の頭まではルンゼ状の雪面を一気に高度を稼ぐ。小窓の王のトラバースは幅の広いバンドで全く不安は無い。三ノ窓へはバンドの途切れた所から雪と岩のコンタクトラインに沿って斜めに懸垂下降40m、しばらく雪面をトラバースし到着。既に十数張りのテントが狭いコルにひしめき傾斜地しか残されておらず、整地に苦勞する。

5月6日(土) 快晴

久し振りに雨の降らない日である。三ノ窓からずっと人が多い。狭い頂上にも入れ代わりたち代わり20人くらいの人が集まっていた。早月尾根の下降は上部の岩場を慎重にクライムダウンする。早月小屋の手前辺りから雪が腐ってきてアイゼンのダンゴがうっとうしい。アイゼンとピッケルからつぼあしとストックに換える。時々振り返って剋岳を仰ぎつつ、長い尾根をひたすら下っていく。1週間ぶりのビールが待ち遠しい。



冬山はハツ峰北面、三ノ窓谷のシュルンドをシェルターにして、雪崩の渦中に正月を迎えた。真暗闇の冷凍庫でただ雪崩の静まるのを待った。登山の躍動はなく、恐怖のひとつきを過ごし、冬の山を確かめてきたに過ぎない。袋小路の奥深くでもがいている我が姿はまごうかたなき崎人である。今回も山の話は止めようと思う。昆虫中年サイクリストの感慨である。

☆

山好きの契機に昆虫採集というのが、ちょっと昔の登山者には多くて、素晴らしい紀行文を残したナチュラリストは例外なくその体験を持っている。森林浴やバードウォッチングも自然探勝の方法にはちがいないが、どうも昆虫採集とは微妙に自然に対する受け取り方が異なるように思う。それは、木や草花や野鳥に対しては、興味のない人はいても嫌う人はいないのに、虫には好き嫌いがはっきり分かれているせいかもしれない。

昆虫は好きな人には宝石のように見え、動態視力に秀れ、一瞬の動きに種同定をし、狩猟的興奮の猛々しさを露わにして、捕らえ殺し標本にする。標本にするると一変して、芸術品を鑑賞するような繊細な美意識が働いて、その造形美に感嘆する。むきだしの嗜虐と愛着は吹雪と日溜まりの対比のようなリアルな自然を連想さす。

嫌いな人には恐怖の対象だ。虫はあきらかに嫌われることが多い。言葉からしてマイナスイメージである。虫^{むし}酸が走る。虫の居所が悪い。虫歯、弱虫、虫の報せ、虫の息。何もいいところがない。

世の中の大半の人は誤解をしている。実際、虫の害で人間は大変な迷惑を被ってきたが、虫には虫の理由があって、そういう生き方しかできないのだから、善悪の問題ではないのに、坊主憎けりゃの類で、その姿形、存在まで嫌ってしまう。バラの花を愛でる心が、葉についたアブラムシで台無しになるような脆弱な美意識や、小鳥の死を悲しむ心で、ゴキブリトラップを平気でかける鈍感な感性の持ち主には、とうてい自然美を解することはできない。造花か映像で楽しむのが分相応というものだ。

登山はけっこう本物の美意識を育てる。自然の巨大さ、無慈悲さ、デタラメさは全くの擬人的形容の外にあって、ぬるま湯的な自然讃歌は受けつけない迫力がある。そこには、無菌培養された胡蝶蘭のような美ではなく、腐臭と汚濁にまみれた無数の生物のおりなす大シンフォニーの清冽な美がある。

自然を構成する全ての素材は美しい。廃屋の土壁は薄汚いが、巣をかけた女郎蜘蛛は美しい。自販機のアキカン醜悪だが、群れ集まる蟻の列は美しい。ゴキブリのつややかなベッコウ色の翅は形容しがたい美である。人の作った物は機能を失うと醜くなるが、自然の創造物は死んでからこそ有益である。落葉は死体だが、溝や樋が詰まると文句を言う無粋な輩でさえ、その風情を疑うことはない。本来なら土になり、万物を育む壮大いとなみの一部であって、人間にいじわるする気など毛頭ある訳ではないのである。樋やアスファルトの存在の方が自然から見ると悪とっていい。

人口林とブナ林、美醜の差は人工の度合に内在していて、我々が良しとして余計なおせっかいをする時、その粉飾の量だけ美を損なうのである。同じ論法で虫に善悪はなく、害益の差別は我々の都合に他ならず、美醜を問うというようなオグリは慎まねばならない。

山岳とはそういう人工の拒否された自然を象徴する。スキー場、ゴルフ場、果てはスカイライン、そのような山は最早山ではない。山が喘いでいる。登山する心はそういう世界を嫌悪する。私は決してゴルフはしないし（スキーはしたいけど）、ドライブの快楽を求めない。

☆

人間は自分を中心にして考えがちだから、他の物が自分に有利か不利かで差別するのみならず、それから普遍的な価値観さえ導き出して得々としている。食物連鎖の頂点を自認する人間は食物を取る方ばかりに関心があって、与える雲古を見捨てて振り返らない。食物連鎖において、獲得か提供かはいづれを始点と見るかで大いに様相が違ってくる。

自然進化をサバイバル・オブ・フィittestと考えるのは取る方の論理で、与える視点はない。ナチュラル・セレクションは、なるようになるというのが如き意味不明な言葉だが、幾分両者に均等の役割を認めている。現実にはヌーの数がライオンの数より圧倒的に多いのだから、ヌーの方がよりよく適応していると考えていい道理だ。多く与える方が多く生きると考えてもおかしくない。

食物連鎖は連環というべきで頂点など存在しないのだが、草食獣のタンパク質量に規定される肉食獣の数の軋を断って、増殖する巨大な粘菌の如き人間社会は、提供すべきデス・ボディや雲古で元焼却してしまう。この膨大なタンパク質を虫や微生物の食卓に載せたら、どれだけ良い土、よい植物を育てるだろう。人間は最後の最後まで取るばかりで、勝手に極楽浄土に昇天してしまう。あまつさえ、虫ケラ畜生の現世に厭離穢土の捨て台詞、勝手に死ね！登山において、もとより与えるものは何もないが、初登頂をかすめ取っても、山

は痛くも痒くもない。自然探勝したって、風光明媚が減る訳でもない。強いて挙げれば、何もしないこと。生産活動でなく、破壊活動でなく、身一つを山の一角に安んじて潜むことに、消費の少なさで自慰するぐらいか。

☆

人間のいとなみの犠牲となって、多くの種が絶滅している。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』がリバイバルで人気があるようだが、野鳥のさえずりより、昆虫の方がずっと農薬の犠牲になってきた。「ホロコーストの夏」とでもいいなくなる程根絶やしにして、虫好きにはもう涙もでない。

夏の夕暮れ、空高く飛翔するギンヤンマの群れはどこへ行ったのか、今では山際の溜池あたりにしかいない。相変わらず多いのは、南洋産の渡り昆虫の薄羽黄トンボ（シケトンボ）ぐらいのものだ。それも、紀伊の国道を走れば、夥しい数が路上に倒れている。交通事故だ。そういえば、北海道でもたくさんのエゾトンボの死骸を見た。北海道では網を振ることもなく、交通事故死を拾うだけだった。それでも本州では少なくなったクジャクタテハなどを手に入れた。

秋津洲根瑞穂の国とは古代の日本の美称だが、トンボがいなくなり、米も自由化で休耕田が多くなっては、もうこの名称も死語になるかもしれぬ。トンボの行く末を悲観し、つまりは本物の自然を愛好する岳人の消滅を予感して詠める。

海辺路の南風^{はえ}に誘われ 秋津洲
輪禍^{さだめ}に倒る 運命知らねば

シャラシャラと翅ずれの音に 夢紬ぐ
ギンヤンマのせつなき色ブルー

前号で失業と書いて、言わずもがなの恥をかいた。すぐに就職したので、原稿をボツにして欲しいと矢倉に連絡したが、時すでに遅く、会員諸氏に披露してしまった。西村に「リルンのサミッターがそんなカッコ悪いことでは困る。」とグチられた。「ほっとけ」と思いつつ、そういう悲しい連帯感も世のしがらみかと、いっそう暗い気分になった。もっとカッコ悪くなる予感におびえている自分を同窓生はしっかりと見破っているようである。

☆

『岩と雪』168号、169号で「鋸沢幻視行」を発表しました。ご一読下さい。ところでこの専門誌は169号で休刊となりましたが、私のせいでは決してありません。